



新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部
ボランティアセンターは持続可能な開発目標
(SDGs : Sustainable Development Goals)
の達成に向けた取り組みを強化しています。



新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部ボランティアセンター活動情報誌

Niigata Seiryō University

SEIRYO VOLUNTEER

2025-2026 Information Magazine
www.n-seiryō.ac.jp



ともに育ちあい、その先へ

SEIRYO

ともに育ちあい、



CONTENTS

続く支援の現場から

～令和6年能登半島地震 学生ボランティア第2弾・第3弾の記録～

.....4

- ① 「その後」に寄り添い続ける学生たち
- ② Interview
向き合う中で見えてきたもの
- ③ 現地での経験を、次の実践へ

一人ひとりが主役になれる場所

～想いをつなぐ、バンブーフエスティバル～10

- ① つくる過程そのものが学びになっていく
～バンブーフエスティバル当日までの日々に密着～
- ② そして迎えた当日！会場は笑顔でいっぱい



ぼらくとイメージキャラクター
ぼらくトリオ

ぼらフェス 202516

ボランティアセンターの概要18

学生ボランティアコーディネーター20

『ぼらくと』の概要とメンバー紹介22

その先へ

『SEIRYO VOLUNTEER』とは

『SEIRYO VOLUNTEER』とは、ボランティアセンター直属の学生スタッフである学生ボランティアコーディネーター（通称：ぼらくと）が制作・発行する活動情報誌です。2014年に創刊した「ボラセン NEWS」を皮切りに、2019年から現在の形になり、年1回の発行を続けています。

ボランティアセンターに設置するだけでなく、高校生や新入生にも広く知っていただけるよう、オープンキャンパスや年度初めのオリエンテーションなどでも配布しています。

また、『SEIRYO VOLUNTEER』は、本学ホームページからもご覧いただけます。活動情報誌の郵送も受け付けておりますので、ご希望の方は、ボランティアセンターまでご連絡ください。

VOLUNTEER

続く支援の現場から

今も災害の爪痕が残る能登半島

令和6年1月1日に発生した能登半島地震は、最大震度7を観測し、能登地方を中心に甚大な被害をもたらしました。さらに同年9月には奥能登豪雨が発生し、被災地は「二重被災」という、より深刻で長期的な困難に直面しています。

家屋の倒壊や道路の寸断といった目に見える被害に加え、上下水道などのライフラインの停止、生業の喪失、地域コミュニティの分断など、生活の基盤そのものが揺らぐ状況が続いています。半島特有の地理的条件や高齢化の進行もあり、復旧・復興には長い時間が必要とされています。

一方で、七尾市のように外見上は大きな被害が見えにくい地域もあります。建物が残っているように見えても、屋内では天井の崩落や家具の転倒が起きており、安心して暮らせない世帯も多く残っています。被害が「見えにくい」ことで、支援が届きにくくなっている状況があります。

災害は、発災直後だけの出来事ではありません。時間の経過とともに浮かび上がる課題や、支援の縮小によって生まれる孤立もあります。被災地では、今も災害の爪痕が多く残り、様々な困難があることを、私たちは改めて伝えていく必要があります。

本学では能登半島地震の発生以降、学生とともに継続した災害支援活動に取り組んでいます。発災直後は、募金活動や新潟市西区での災害ボランティアセンター運営補助、救援物資の積み込み支援など、現地に行くことができないでもできる支援から始まりました。その後、本学からボランティアバスを派遣（2024年8月）し、現地に足を運び、被災者の声に耳を傾けることや、作業は支援の「入り口」であることを学びました。

その学びを土台に、第2弾（2025年3月）・第3弾（2025年8月）では、地域の状況に応じた関わりを重ねています。同じ地域を複数回訪れることで、復旧・復興の進捗や変わらない課題といった、時間が経ったからこそ見えてくる被災地の姿があります。ボランティアセンターとしても、支援を一度きりで終わらず、学生とともに現地と向き合い続けることの大切さを、そして風化させずにいかに教訓を伝え続けるべきかを今あらためて問われています。

※第2弾・第3弾の実施にあたっては、日本財団ボランティアセンターとの共催、公益財団法人スポーツ安全協会 スポーツ普及奨励助成事業による助成金、災害NGO 結、おらっちゃん七尾、白米千枚田愛耕会の皆さまのご協力のもと実現することができました。

Continuing Support, and What Lies Ahead

七尾市で学んだ支援の入り口（第2弾）

3月11日（火）～13日（木）にかけて実施した第2弾の災害支援ボランティアでは、七尾市と輪島市・千枚田を中心に活動を行いました。

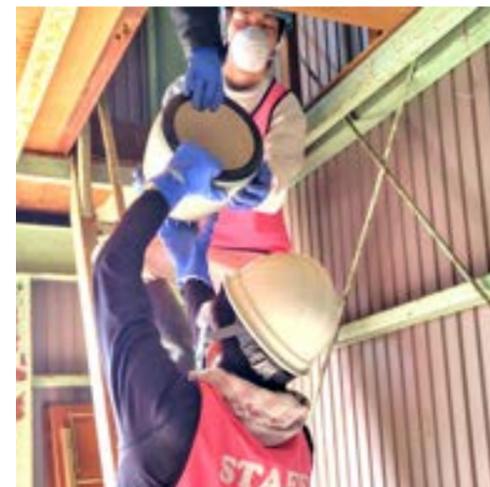
初日は、「民間災害ボランティアセンターおらっちゃ七尾」にてオリエンテーションを受け、被災状況や現地が大切にしている支援の考え方について学びました。その中で、学生たちの心に強く残ったのが、「作業は、支援の入り口である」という言葉です。

七尾市では、被害が外から見えにくく、支援が届きにくい地域も少なくありません。だからこそ家財出しなどの作業支援に加え、個別訪問やお茶会、マッサージといった、人とつながる支援が重視されていました。作業をきっかけに被災者の声を聴き、関係を築くことが、支援の第一歩になる——。学生たちは、現地でその意味を実感しました。



作業の先にある希望

輪島市・千枚田では、地震と豪雨によって流入した土砂の撤去作業を行いました。急斜面のため重機は使えず、人の手による作業が続く中、「今年も作付けができるかもしれない」という住民の方の言葉に、住民・学生双方が作業の先にある希望を感じ取る時間になりました。



また、家財整理や被災者世帯への訪問では、住民一人ひとりの想いに向き合いながら活動を行いました。土砂にまみれ、捨てるつもりだった家財の中から大切な思い出の品が見つかり、涙ながらに感謝の言葉をいただくこともありました。支援とは、作業を進めることだけではなく、相手の声に耳を傾けることから始まる——。そのことを現場で経験しました。

「その後」に寄り添い続ける学生たち

継続参加がもたらした気づきと変化（第3弾）

8月19日（火）～21日（木）にかけて実施した第3弾の活動場所は、第2弾に続き、輪島市・千枚田でした。今回は、白米千枚田愛耕会の皆さまと一緒に田植えを終えた畔の草刈り作業を行いました。継続して参加した学生からは、「前に来たときと、景色があまり変わっていない」という声も聞かれました。一方で、同じ場所を再び訪れたからこそ、前回との違いや、少しずつ変化が起きていることにも気づきました。



◀ 作業の合間には、愛耕会の皆さまから、震災後の暮らしや高齢化・後継者不足といった地域の課題について直接お話を伺いました。災害支援とは、農業や観光といった生業を支えることが、地域の再建につながるという新たな学びとなりました。



時間をかけて関わることで、被災地は「助ける場所」から「ともに考え、ともに支える場所」へと学生の認識は変わっていきます。現地で求められている支援に向き合い、継続して関わる中で、支援に対する捉え方も少しずつ変化していきます。支援のかたちは一つではありません。

その時、その場に応じて柔軟に考え続ける姿勢の大切さを、学生たちは肌で感じていました。



Interview

向き合う中で見えてきたもの

被災地での活動を重ねる中で、現地の方々の言葉や姿勢に触れ、学生たちは迷いや葛藤を抱えながらも、支援を通して得た小さな手応えを語ってくれました。その姿から災害支援を「特別なこと」ではなく、自分と社会をつなぐ経験として捉え始めている様子が見えます。



第3弾に参加



初めて現地に立って見えたこと 人間総合学科2年 小野 瑠菜さん

私は道が崩れ、屋根をブルーシートで覆った家々が残る風景を実際に目の当たりにし、ニュースで見る映像とはまったく違う重みを感じました。被害の大きさを実感すると同時に、愛耕会の皆さまや地域の方々が温かく迎えてくださったことが心に残っています。だからこそ、被災された方が今何を求めているのかを考える姿勢が大切だと感じました。作業をするだけでなく、話に耳を傾け、気持ちに寄り添うことも支援の一つであり、これからも自分にできる関わり方を考え続けていきたいです。

つながりの中で続く復興 社会福祉学科2年 坂口 冬音さん

私は第2弾、第3弾と続けて現地を訪問したことで、以前より千枚田で田植えができる場所が拡大され、復興が前へ進んでいる様子を感じることができました。それは愛耕会の皆様や多くのボランティアが想いをつなぎ、活動を続けてきたからこそだと思います。今回私は現地で関わる様々な方々とより多くのコミュニケーションを取る中で地元の方の明るさに触れ、私自身が何度も励まされました。支援する側とされる側ではなく、互いに支え合っているのだと実感しました。この経験を周囲にも伝え、学びを広げていきたいです。

第2弾・第3弾に参加



第2弾・第3弾に参加



復興の先にある変化を見て 社会福祉学科2年 下田 朝己さん

第2弾と第3弾の活動では、倒壊していた家屋の修復が進み、現地は復旧から復興の段階へと着実に歩みを進めていました。しかし、市内を移動する中で、以前より家屋が減っている現実にも気づきました。若い世代が震災を機に県外へ転出し、解体された家も多いと聞き、災害は風景を変えるだけでなく、その後の地域の未来にも影響を及ぼすことを知りました。ボランティアで出会った被災されたご高齢の方からいただいた「若い人と話すだけで力になる」という言葉を胸に、関わり続けることこそが、私たちにできる支援なのだと感じています。

現地での経験を次の実践へ

被災地での経験は、現地での支援にとどまらず、それぞれの立場で得た学びを、防災・減災を考える次の行動へとつなげる取り組みへと少しずつ広がっています。ボランティアセンターでは、経験を社会へつなぐこと、災害を自分ごととして捉えること、そして支援の「次のかたち」を考え続けることを重視しながら、今後も学生や関係者とともに災害支援に取り組んでいきます。災害は過去の出来事ではありません。だからこそ、立場を超えて関わり続けることを大切に、これからも一歩ずつ歩みを重ねていきたいと考えています。

赤十字子ども若者みらい会議に参画

赤十字子ども若者みらい会議は、日本赤十字社新潟県支部が主催するプロジェクトです。2022年度から本学学生も参画しており、今年度は青年赤十字奉仕団としても活動する学生5名が参加しました。本事業では、過去の災害から学び、生きる力や地域と支え合う力を育むことを目的に、事前学習・視察研修・事後学習を通して学びを循環させています。東日本大震災に関する福島県での視察では、被災地の現状や震災遺構に触れ、発災直後の避難における迅速な判断の重要性や、教訓を語り継ぐ意義について学びを深めました。学生が自ら学び、考え、行動する力を養い、防災を日常の実践へとつなげています。



「いつものもしも CARAVAN 新潟」にボランティア参加



9月6日(土)～7日(日)に新潟市で開催された内閣府等が主催する「防災推進国民大会(ぼうさいこくたい)」と呼ばれる日本最大級の防災イベントの併設イベント「いつものもしも CARAVAN 新潟」(主催:新潟県、株式会社良品計画)に、2日間で24名の学生がボランティアとして参加しました。学生たちは、これまで継続して取り組んできた被災地支援や防災啓発の経験を生かし、出展企業の来場者対応やブース運営を担いました。こうしたイベントへの参画は、日頃の学生の地道な活動が学外でも評価された結果であり、学生の成長と社会とのつながりを感じられました。

「災害支援コーディネーター養成研修」の企画運営委員として出席

災害時に開設される災害ボランティアセンターの意義と役割を理解し、災害ボランティア活動を円滑に進めるため、社会福祉協議会、行政、NPO、青年会議所などの関係団体と連携・協働しながら被災者支援活動を実践できる人材を養成する「災害支援コーディネーター養成研修」が、毎年12月から2月にかけて開催されています。新潟市西区災害ボランティアセンターでの支援活動がきっかけとなり、昨年度に引き続き、本学ボランティアセンターの職員1名が企画運営委員として参画しました。

平時から地域や関係機関とのつながりを築くことの重要性を改めて認識しました。それと同時に、被災者が求める支援をより深く理解する貴重な機会となりました。



〜想いをつなぐバンブーフエスティバル〜

一人ひとりが 主役になれる場所

バンブーフエスティバルは、本学および佐渡市内の通信制高校の卒業生である片岡さんの発案をきっかけに生まれた地域交流型のイベントです。通信制高校教員の高柳先生の賛同のもと、生徒や卒業生、地域団体が協力し、竹林整備や地域資源の活用を通して、世代を超えた交流の場として育まれてきました。

今年度は7月20日(日)に開催され、本センターも共催団体として参加しました。現役学生が企画・準備段階から関わり、竹という身近な資源を生かしながら、子どもから大人までがともに一日をつくり上げました。卒業生の一声から始まったこの取り組みが、どのように地域に根ざし、広がりを見せているのか。その背景にある想いに迫ります。

※今回の活動費の一部には、日本財団ボランティアセンターの助成金を活用しています。



2025年3月
本学臨床心理学科卒業
片岡 沙良さん



INTERVIEW

バンブーフエスティバルが生まれた理由

中心となって活動を引っ張ってきた片岡さんは、4年前、佐渡の子どもたちが楽しめる活動を考える中で、どうしても一緒に取り組みたい人たちがいました。それが、通信制高校に通う生徒や卒業生、生きづらさを抱えているグレーゾーンや引きこもり・不登校の人たち、障害のある人たちです。新しい経験を得るためには配慮が必要な場合も多く、一般的なアルバイトやボランティアでは参加のハードルが高い状況があります。だからこそ「誰かの笑顔や幸せに関われる経験の場を一緒につくりたい」。そう語る片岡さんの想いが、今の活動につながっています。



人生の目標と、その原点

片岡さんの人生の目標は、子どもたちが自分の人生を前向きに捉え、ワクワクしながら生きていけるよう、そのお手伝いをする事です。私自身、悩み苦しんでいた時期に、佐渡の人たちとの出会いやボランティアの経験を通して、「こんな私でも人の役に立てる」「大きなことをしなくても、ちょっとした気遣いや言葉で十分だ」ということに気づきました。この経験が、今の活動のすべての原点になっています。

佐渡への想いと、続ける理由

佐渡市内の通信制高校に通う生徒の中には、地理的な事情などから、放課後の交流や社会と関わる機会が限られたまま、進学や就職をきっかけに島を離れていく人も少なくありません。それでも私は、社会人になった今も、佐渡や子どもたちとの関わりから離れられずにいます。その理由は、人生に迷っていた私に、**佐渡で出会った人たちが、たくさんの気づきや居場所を与えてくれたから**です。支えられ、受け止めてもらった経験があったからこそ、今の自分があります。だから今度は、誰かを支える側として、この場所に関わり続けていきたい。そんな想いが、私を佐渡につなぎとめています。

佐渡でしかできない体験を子どもたちへ

活動のかたちとして、当初は常設の居場所づくりも検討しましたが、自分が関われる時間や体制を考えると、まずは「イベント」という形が現実的だと考えました。イベントはゴールが分かりやすく、やるべきことも整理しやすいため、最初の一步を踏み出しやすい方法です。こうして、「子どもたちが楽しめること」「イベントを開催すること」「さまざまな背景を持つ人たちと一緒につくること」という三つの柱を定めました。イベントの手段として竹を選んだのは、「**佐渡でしかできない体験**」にしたかったからです。竹は遊具にも道具にもなり、使い方に正解がありません。だからこそ、子どもたち一人ひとりの発想や個性が、自然と引き出されていきます。このイベントを通して、かつての私がそうであったように、**支えられる側だった人が、誰かを支える側になる喜びを感じてほしい**と考えています。そして、その経験が次の活動へとつながっていくことを目指しています。



イベント本番となる7月20日(日)に先立ち、7月12日(土)～13日(日)の1泊2日で、企画学生3名と教職員2名が佐渡を訪れ、高柳先生が運営する通信制高校の学校生活支援拠点を訪問し、卒業生の片岡さんや高校生たちと事前の準備を行いました。

初日はイベント当日の道具やブースの確認を行う予定でしたが、「大学生も1つブースを考えてみてほしい」という声かけをきっかけに、急ぎよ高校生と大学生が一緒になってブース企画を考えることになりました。



2日目は、本格的な準備と竹製遊具の試作を進めました。通信制高校の生徒たちは竹の扱いに慣れており、のこぎりや電動ドリルを器用に使いこなす姿が印象的でした。

生徒に用具の使い方を教わりながら、意見を交わすうちに、自然と役割が生まれ、学生たちのブースも少しずつ形になっていきました。お互いに刺激し合いながら、よりよい企画となるように本学学生も携わっていました。「当日を成功させたい」という想いが高まると同時に、先生方・卒業生へのリスペクトが感じられる時間となりました。



イベント前日の7月19日(土)には再び佐渡を訪れ、最終準備を実施しました。実際に道具を使って遊びながら安全面の確認や、安心して楽しめるようルールについて話し合いました。初対面だった高校生たちとも、作業を通して次第に打ち解け、和やかな雰囲気の中で準備が進められました。

本番に向けて積み重ねられた一つひとつの時間が、当日のにぎわいと笑顔へとつながっていききました。



つくる過程そのものが

～バンブーフェスティバル当日までの日々に密着～

学びになっていく



フェスティバル前夜、佐渡の星空の下で交流の時間が設けられました。高校生、大学生、卒業生、教職員、地域住民は肩書きや立場を超えて過ごしたこのひとときが、翌日のチームワークと安心感につながっていききました。



◀用意していただいた料理には、竹の筒を器にして炊いた竹筒ご飯や、高校生が自ら採ったサザエなど、地域の食材を生かした品々が並びました。

主役はいつも子どもたち

～子どもたちを支える高柳先生～

温かな笑顔で私たちを迎えてくださった高柳先生は、常に現場に立ち続ける教育者であり、実践者です。

その行動力と柔軟な視点は、

子どもたちからの大きな信頼を集めています。



通信制明誠高校
佐渡 SHIP 代表
高柳 一巳 先生

高柳先生が大切にしているのは、子どもたちを誰かの目的のために動かす「駒」にしないことです。進学や就職といった成果よりも、自分で考え、選び、人生の目標を更新し続ける力を重視しています。起業は、その力が育った先にある一つの選択肢にすぎません。活動の根底にあるのは、「子どもたちが今、楽しいと感じているか」という問いです。その実感が、やがて未来を考える力へとつながっていきます。また、高柳先生自身も、子どもたちの活躍の場を広げようと自身が実践者、挑戦者として地域の方々と関わり、そこでの学びを還元しています。

「主役はいつも子どもたち。前に立つのではなく、そっと支える存在でありたい。」

——高柳先生の「支える立場に関わること」への強い姿勢を感じました。

高柳先生が運営する通信制高校

小・中・高校生や不登校・ひきこもりの状態にある子どもたちが、安心して過ごせる居場所と学びの場を提供しています。学校の学習に加え、竹を使ったものづくりや地域交流、起業を意識した体験的な活動にも取り組んでいます。遊びや実践を通して人と関わり、将来は起業や地域づくりに挑戦できる人材の育成を目指しています。



INFORMATION
通信制明誠高校
佐渡 SHIP

〒952-0318
新潟県佐渡市真野新町 322
0259-55-2888



そして迎えた当日！ 会場は笑顔でいっぱい

当日は、多くの親子連れや地域住民が来場し、会場は終始にぎわいに包まれていました。ジャングルジムや水鉄砲など、竹を使った遊具や水遊びブースが並び、子どもたちの元気な声があちらこちらから響いていました。学生たちが手間ひまをかけて準備した竹製遊具は、単なる遊びの道具にとどまらず、人と人をつなぐ架け橋となっていました。



当日の様子は
Instagram にも！



「一人ひとりが主役になれる場所が佐渡にはある」

——高柳先生のこの言葉は、本取り組みの本質を端的に表しています

役割を持って輝く姿

通信制高校の生徒たちは、来場者対応や運営を主体的に担い、いきいきと活動していました。一人ひとりが自分の役割を持ち、力を発揮できる場が確かに存在していることを印象づけるものでした。

本学の学生にとっても、背景の異なる若者たちと協働するこの経験は、学びの多い、かけがえのない時間となりました。



本学では、卒業生・在学生・高校生が継続的に地域と関わり続ける仕組みを大切にしていきたいと考えています。後輩世代の学びを支えようとする卒業生の姿は、その象徴ともいえるものです。今回の関わりを一過性のものに終わらせるのではなく、今後は、佐渡と新潟の双方で交流の機会を創出し、企画段階から学生が主体的に参画できる体制を整えながら、地域連携型教育の実践モデルとして発展させていくことを目指します。

卒業後も続く地域とのつながりは、本学の教育の延長線上にあるものです。こうした循環が、次の学びと挑戦へと受け継がれていくことを期待しています。



▶ アイデア出しから制作まで学生が主体となり、竹製のもぐらたたきゲームを仕上げました。事前の準備は大学でも続けられ、当日の子どもたちの笑顔を思い浮かべながら、協力して行いました。



▶ お宮の境内を子どもたちのために快く提供して下さった宮司さんや、毎年スタッフへ無償でお弁当を用意して下さる地域のご夫婦の存在も、このフェスティバルには欠かせません。地域の皆さまの優しさが、フェスティバルを支えています。



ぼらフェス 2025

10月25日(土)～26日(日)に開催された本学の学園祭「青空祭」において、今年も「ぼらフェス2025」としてボランティアセンターのブースを出展しました(出展は2日目のみ)。

学生たちが日頃取り組んでいる活動を広く発信し、来場者の皆さまにボランティアをより身近に感じていただくことを目的とした企画です。今年度の活動紹介や体験企画を通して、楽しみながら学べる機会を提供しました。

会場では、今年度の主な取り組みをテーマ別に紹介するとともに、佐渡でのバンブーフエスティバルに関連した竹のわなげや魚釣りなどの体験コーナーを設置。さらに、クイズスタンプラリーも実施し、全問正解者にはお菓子をプレゼントするなど、参加型の企画でにぎわいを創出しました。

来場者の皆さまからも好評をいただき、会場は終始楽しそうな笑顔に包まれました。また、骨髄バンクの活動紹介も行い、多くの方々と交流することができました。学生にとっても、自らのボランティア活動を振り返り、その意義ややりがいを改めて実感する貴重な機会となりました。



▲学園祭前には佐渡に赴き、自分たちで伐採した竹を使って竹とんぼを作製しました。来場者の皆さまには思い思いのイラストを描いていただき、世界に一つだけの竹とんぼづくりを楽しんでいただきました。

あの夏の思い出をもう一度 体験で広がる！バンブーフエスティバルブース



7月に佐渡で開催した同イベントについて紹介するとともに、当日に使用した竹製道具を体験できるコーナーを設置しました。屋内でも楽しんでいただけるような遊びを用意し、来場者の皆さまに体験していただきました。

見て・知って・楽しむ！

青年赤十字奉仕団ブース

幼児安全法養成講習や赤十字子どもみらい会議活動をポスターで紹介するとともに、日本赤十字社新潟県支部からお借りした物品の展示やフォトスポットの設置を行いました。防災の知識を伝達しながら、奉仕団の活動を身近に感じていただく機会となりました。当日は日本赤十字社公式キャラクター「ハートラちゃん」も来場し、子どもたちとの写真撮影などで会場を盛り上げてくれました。

青年赤十字奉仕団とは？

本学では2014年に青年赤十字奉仕団を再結成し、より積極的に防災や災害救護活動に対応できるよう、日本赤十字社新潟県支部と連携し、団員の育成及び活動の活性化を図っています。

学生が伝える、現地の今

能登半島地震災害支援・環境整備ブース

災害支援では、これまでの募金活動や救援物資搬入作業などの活動や、8月の第3弾ボランティアバス派遣に参加した学生が中心となり、現地の様子や活動を通して感じたことを発信しました。学生の言葉を通して、災害支援の現状をより具体的に知っていただく機会となりました。

環境整備では、海風や砂から住宅地を守るための伐採木の粉碎作業や松苗の植樹活動をクイズ形式で分かりやすく紹介しました。



VOLUNTEER CENTER

ボランティアセンター

本学ボランティアセンターは、ボランティア活動に関心がある学生とボランティアを依頼したい団体等と丁寧につなぎ、サポートしています。また、近年は、新潟青陵学園として大学、短大のみならず幼稚園、高校も交えた活動を展開しています。ボランティアセンターとして社会情勢の変化に柔軟に対応し、地域社会と関係性を築きながら社会に開かれた活動を目指します。



ボランティアセンターの想い

1. 自ら積極的に動く学生を育てる
2. 社会との接点をつくり、社会を理解する
3. 豊かな心を育てる

ボランティアセンターの活動内容



ボランティア情報の提供

ボランティア活動を希望する学生に対し、学内のポータルサイトや掲示板等でボランティア情報の提供を行っています。また、本学園の幼稚園や高校とも連携した活動を行っています。



コーディネート

ボランティア活動に関心がある学生とボランティアを依頼したい団体と丁寧につなぎ、サポートしています。また、学生のボランティア活動前の不安などの相談にも応じています。



ボランティア活動

災害時の支援活動、共同募金、福祉施設、病院、地域の中でボランティア活動を行っています。他にも、学習支援活動、青年赤十字奉仕団活動等があります。



調査・学術的研究

ボランティア活動における学生のニーズ調査等を行い、時代に合わせたサポートや情報提供を行っています。



イベントや研修会の企画運営

ボランティア活動を始めたい学生や、ボランティア活動に磨きをかけたい学生のために様々なイベントの企画・運営を行っています。



学生ボランティアコーディネーターの養成

学生と同じ視点でコーディネートができる学生スタッフを養成しています。ボランティア活動の企画や日頃のコーディネートを行い、主体性・人間性の向上を目指します。

大学1年生と編入生の必修科目との連携

4月18日(金)に本学の大学1年生と編入生の必修科目である「地域連携とボランティア」と連携し、『Change & Challenge ボランティアへの一歩を踏み出そう』と題して授業を担当しました。

さらに、フィールドワークとして6月20日(金)には、『2025 SEIRYO CLEAN UP DAY』と題し、この授業と連携した活動も行いました。当日は関係者を合わせると約300名の参加者でした。

普段の授業とは異なったフィールドワークを通して、実際に活動を行うことでしか得られない学びがあったと思います。

これらの授業を通じて、ボランティアの魅力に気づいてもらうきっかけづくりや、新入生とボランティアをつなぎ、今後の大学生活への後押しができたのではないかと思います。



学園をつなぎ、地域と育つ ~ 高校生との高大連携の取り組み~



9月9日(火)に新潟青陵高校 高大一貫コース2年生を対象とした、高大連携授業内にて活動紹介を行いました。災害支援や青年赤十字奉仕団などの取り組みを紹介し、高校生と大学生が協働する様子や、やりがいや学びといった学生の声も伝えました。「まずは一歩踏み出すこと」の大切さが、少しでも届いていれば嬉しく思います。

後半のフリートークでは高校生から「ボランティアに参加してみたい」という声も聞かれ、ともにボランティアを考える穏やかな時間となりました。

地域イベントにおける高大連携の実践

本学は2014年より地域イベントに継続して参加し、2017年からは新潟青陵高等学校との高大連携事業として、高校生と大学生が協働する形でボランティア活動を行っています。地域をフィールドに、ともに学び、ともに支える実践を積み重ねています。

2025年度も、春と冬のイベントで協働活動を実施しました。5月開催の「古町どんどん2025春」では延べ70名が参加し、会場設営やごみ回収、緑日補助などを担当しました。2月の「にいがた冬食の陣当日座」では延べ64名が参加し、ECOステーション運営やアンケート対応などを担いました。

いずれの活動でも、学校の垣根を越えて生徒と学生が協力する姿が見られ、地域の皆さまからの温かい声が励みとなりました。高校時代にこの活動へ参加し、本学進学後も継続して参加する学生もおり、高大連携の取り組みが自然なつながりとして育まれています。



学生ボランティアコーディネーター

VOLACT

ぼらくと

本学では、学生ボランティアコーディネーターという制度を設けており、“Volunteer (ボランティア) + Act (行動する)” 通称『ぼらくと』としてサークル活動ではなく、ボランティアセンター直属のスタッフとして活動しています。2013年4月に発足し、2026年で13年目に入ります。

『ぼらくと』は東日本大震災でボランティアバスを出した際に「私たちにできることは何だろう」、「一緒に活動する仲間をもっと増やしたい」という想いが生まれたことをきっかけに学生から学生にボランティアの魅力を伝えられる組織を作ろうと発足しました。学生と同じ視線に立ち、学生に向けたボランティア活動の充実やコーディネーターとしてのスキルアップ事業の開催、学生と外部をつなぐ役割を担っています。



任命までの流れ

01 周知・活動紹介
ぼらくとのことを周知するために新入生の必修科目や新入生歓迎会にて募集を兼ねて活動紹介を行っています。

02 申し込み
募集要項を確認して加入の申し込みをします。

03 養成研修への参加
ボランティアセンターの役割、学生ボランティアコーディネーターを務める上での知識・技術などを学びます。

04 任命式
養成研修の参加を経て、最終的に意思確認を行い、正式に学生ボランティアコーディネーターとして任命され、センター長から任命書が授与されます。



VOLACT の使命

1. ボランティアの**魅力**に気づく学生を増やす
2. ぼらくと自身の**人間力**を磨く
3. 地域との**信頼関係**を大切にする

VOLACT の 日常活動のご紹介



ボランティア活動のサポート

学生に満足度の高いコーディネートができるようにボランティアや研修会、学外の活動へ積極的に参加しスキルアップを図っています。
また、一緒にボランティア活動を行いながらサポートも行っています。



定例ミーティング

月に2回定例ミーティングを実施し、情報共有や活動報告、協議などを行い、一人ひとり意見を出し合う機会も大切にしています。
オンライン形式と対面形式を組み合わせ実施しています。



広報活動

主に『SEIRYO VOLUNTEER』というボランティアセンターの活動情報誌と Facebook、Instagram にて広報活動を行っています！
学生の生の声を新鮮なうちに届けることを大切にしています。ぜひチェックしてみてください。

ぼらくとについて 楽しく学び、理解しよう

学生ボランティアコーディネーター養成研修

ボランティアセンターの役割や学生ボランティアコーディネーターとしての心得など基本的な知識・技術を学び、理解するとともにメンバー同士の交流を深めることを目的に学生ボランティアコーディネーター養成研修(通称：ぼらくと研修)を年に2回行っています。



共に活動する仲間と 楽しいイベントも開催！

クリスマス会兼ランチ交流会

今年も学生企画のクリスマスイベントを開催しました。クリスマスケーキのデコレーションや、プレゼント交換などのレクリエーション、ランチ交流会を通じ、メンバー同士の交流を深め、来年度の活動への意欲を高める場となりました。



VOLACT

2025年度 学生ボランティアコーディネーター 『ぼらくと』メンバー紹介



人間総合学科 1年
長瀬 春羽



看護学科 1年
阿部 桜子



看護学科 1年
飯田 優希乃



看護学科 1年
石井 志歩



看護学科 1年
岩坂 瑠那



看護学科 1年
中川 楓希



看護学科 1年
中村 雪奈



社会福祉学科 1年
五十嵐 彩乃



社会福祉学科 1年
五十嵐 百華



子ども発達学科 1年
佐藤 俐来



子ども発達学科 1年
藤田 千夏



子ども発達学科 1年
渡辺 璃音



臨床心理学科 1年
神津 汐里



臨床心理学科 1年
福澤 月恋



臨床心理学科 1年
三本 ももか



臨床心理学科 1年
渡邊 和麒



人間総合学科 2年
小熊 瑠菜



看護学科 2年
近藤 杏莉



看護学科 2年
佐藤 時子



看護学科 2年
渡邊 菜々子



社会福祉学科 2年
宇野 捺未



社会福祉学科 2年
坂口 冬音



社会福祉学科 2年
下田 朝己



子ども発達学科 2年
小川 結



子ども発達学科 2年
唐沢 知歩



子ども発達学科 2年
鈴木 莓



子ども発達学科 2年
高橋 紗奈



子ども発達学科 2年
平松 穂花



子ども発達学科 2年
若山 文香



臨床心理学科 2年
古川 優



看護学科 3年
新井 陽奈



社会福祉学科 3年
猪股 千恵



社会福祉学科 3年
蔵田 美莉愛



社会福祉学科 3年
東海林 茜



社会福祉学科 3年
徳永 怜花



社会福祉学科 3年
長谷川 舞



子ども発達学科 3年
関根 千優



臨床心理学科 3年
木村 実結



臨床心理学科 3年
佐藤 天音



臨床心理学科 3年
高橋 ののか



臨床心理学科 3年
沼澤 すみれ



臨床心理学科 3年
和田 かな子



看護学科 4年
石田 綾



社会福祉学科 4年
寺崎 雄晴



社会福祉学科 4年
佐藤 陽梨



社会福祉学科 4年
清水 映作



社会福祉学科 4年
鈴木 里佳



社会福祉学科 4年
高根沢 杏海



社会福祉学科 4年
竹内 瞳



臨床心理学科 4年
大泉 凜



臨床心理学科 4年
松田 一花



場所 / アクセス

～編集後記～

日頃より本学ボランティアセンターの活動に温かいご理解とご協力を賜り、心より御礼申し上げます。皆さまの支えのもと、学生たちは地域活動の中で様々な出会いがあり、学び、挑戦を重ねてきました。

本誌では「ともに育ちあい、その先へ」をテーマに、継続的な災害支援や佐渡でのバンブーフエスティバル、学園祭などの実践を通して育まれたつながりと成長を紹介しています。本冊子が、これまでの歩みへの感謝をお伝えするとともに、ともに育ちあう関わりを思い描く一助となれば幸いです。

学生ボランティアコーディネーター『ぼらくと』一同

学校法人 新潟青陵学園
新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部
ボランティアセンター

〒951-8121
新潟市中央区水道町1丁目5939番地
TEL : 025-266-0189
FAX : 025-230-7751
MAIL : vcenter@n-seiryu.ac.jp
WEB : http://www.n-seiryu.ac.jp/



お越しの際は、
QRコードをご参照ください。
(Google MAPs が開きます。)



新潟青陵大学・
新潟青陵大学短期大学部
公式 HP



本学ボランティアセンター
公式 Facebook



本学ボランティアセンター
公式 Instagram

